

3. コミュニティの将来像

(1) 総合計画におけるまちの将来像

経営企画課 確認依頼分

本基本構想・計画の上位計画である「第3次宗像市総合計画」の策定にあたっては、「むなかたの会議」と題したワークショップを複数回開催し、延べ245人が参加しました。学生や子育て世代も含め、多くの世代からまちの将来像について意見を収集しています。中でもコミュニティと関連性の深いと考えられるキーワードを次にまとめました。

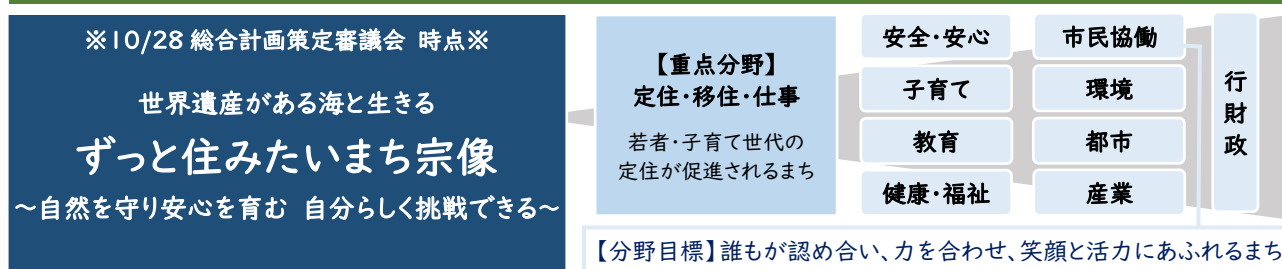
表 3-(1)-1 第3次宗像市総合計画ワークショップで出たキーワード

世代	「世代間交流」「子どもも大人も横並び」「高齢者と子どもたち(のコラボ)」「幅広い世代と一緒に暮らせる」「若者がたくさんいる」「若者の意見が実現できる」「価値観の共有」「住んでいる人が元気」
地域参加	「人とつながる」「チャレンジできる」「困ったことを少しずつ解決」「関わり続ける」「スポット参加」「自分の居場所」
子ども	「子どもまんなか」「子育て支援から子ども支援へ」「おせっかいなまち」「遊べる場所が増えてほしい」「イベントだけでなく日常的なサポートがほしい」「みんなで子育て、みんなで暮らす(家族以外を頼れる社会に!)」
郷土愛	「今あるものを再確認→いいものがたくさんある(むなかたの当たり前に自ら気づく)」「郷土愛(子どものうちから)」「シビックプライド」「地域貢献」「幼少期の思い出」「楽しかった経験」「社会とのつながり」

世代間や地域での人と人とのつながりや、子ども・子育て支援に関わるキーワードが多く、期待感が伺えます。

また、第3次総合計画における将来像は次のとおりです。

図 3-(1)-2 第3次宗像市総合計画におけるまちの将来像(基本構想)



「ずっと住みたいまち」は、子育てや教育環境の充実や、まちの再生、循環が生まれ、継続して発展するまちをイメージしています。宗像にある自然環境等の豊かさ、人が作り出す安全・安心を基盤に、それぞれが望む生活が送れ、チャレンジできる環境を、市民と行政それぞれが整えていくことで、地域を愛し、地域と関わりを持とうとする「シビックプライド」が醸成されるまち、選ばれるまち、住み続けたいと思えるまちを目指します。コミュニティ施策は、まちの将来像を達成するための10分野のうち「市民協働」の中に位置付けられています。

(2) 将来像

本基本構想・計画におけるコミュニティの将来像の検討にあたっては、コミュニティ活動の推進主体であるコミュニティ運営協議会の役員が集う合同研修会（令和5年11月開催）において、「10年後の未来を描く」をテーマにワークショップを開催し、意見交換を行いました。

表 3-(2)-1 将来像ワークショップのグループごとの結果集約

		主な意見
[参加者] コミュニティ運営協議会役員 12地区 50人 [方法] A~Kの11グループに分かれて ワールドカフェ方式で実施		
	主な意見	
A	「みんなが笑顔で元気に生活できる！」 ・役員不足、組織の見直し…若者を参画させる仕組み ・20年の取り組みの検証が必要！	「子ども・親子を中心にしたイベントを！」 ・子どもを中心に親世代も取り込む ・子どもたちが大人になっても地域参加してくれるように ・デジタル活用で、情報の周知や負担軽減で担い手確保！
B	「美しいまち～子どもに受け継ぐ」 ・住み続けたいまちにする ・自然がきれいに整備されているまち ・新しい人も溶け込めるまちづくり ・子どもは10年後の担い手。大人(保護者)もついてくる！	「全世代参加型のまちづくり」 ・10年後は超高齢者～移動手段(バス)の充実 ・子どもが輝くまち～子どものアイデアを反映 ・デジタルとアナログの併用、組織や行事のスリム化
C	「未来の花～10年後に咲く種を蒔く」 ・人材不足や自治会への理解不足が課題… ・子ども中心の事業や若者が輝く場をつくる →若者がふるさとに還る種を蒔く	「安心・安全、高齢者も若者も住みやすいまちに」 ・要支援者の見守りや共働き世帯が安心できるまち ・子どもを真ん中に据えた取り組み→全世代が楽しめる ・コミュニティ、自治会のメリット、情報発信を！
D	「絆が残る宗像」 ・「隣組」が重要。お互いが助け合える関係づくり ・小さい枠組での、小さな事業も大切。 ・自助、公助、「共助」＝「近所」で課題解決！	「子ども中心のコミュニティ ～子どもがいると大人も元気に！」 ・担い手不足…子どもを担い手に！ 親や祖父母も、自治会未加入者も、 子どもを通じてきっかけづくり
E	「絆が残る宗像」 ・「隣組」が重要。お互いが助け合える関係づくり ・小さい枠組での、小さな事業も大切。 ・自助、公助、「共助」＝「近所」で課題解決！	「みんなが元気に笑顔で楽しく ～地域に必要とされるコミュニティ」 ・子どもを真ん中に置いて、全世代参加を ・防災～何かあった時のためみんながつながっておく ・歩みを止めない！（持続可能な地域社会）
	「成熟した大人(高齢者)の社会」 ・もっと若い人や子どもに目を向ける …60代以上の意識改革が必要！	「コミュニティ＝コミュニケーションの場、 全ての世代が活躍できる場に！」 ・企画から子どもたちとコラボ→次世代の育成 ・SNS活用で情報が届く、住民間の橋渡し デジタルとアナログのハイブリットで！

各グループではコミュニティ活動に参加する住民の偏りや担い手不足に対する課題意識が共通して議論されていました。その中でも、今後のコミュニティが目指す姿として、多くのグループで「子ども」「若者」を中心とした多世代が関わるコミュニティ活動を展開することで、10年先、20年先においても持続可能なコミュニティをつくっていきたいという主旨の意見が交わされていました。

これまでに述べてきたように、コミュニティの役割が単なる住民交流に留まらず、地域のつながりを活かした地域課題の解決であること、そして多くの地域がコミュニティ活動への参加者の固定化や担い手不足の現状に危機感を持っていることを考えれば、世代や価値観の違い等、これまでの枠組みにとらわれることなく、より多くの地域住民がつながりを持ちながら、コミュニティに関わる環境をつくっていく必要があります。また、活動への参加、参画を通して、地域への愛着を育み、担い手となりうる人材を増やしていくことでコミュニティの持続可能性を高めることも重要となります。

ワークショップの結果と、これらの現状と今後の課題を踏まえ、本基本構想・計画における将来像を次のとおり定めます。

将来像

**枠をこえて、誰もが関わり、誰からも愛される
持続可能なコミュニティ**

～10年先、20年先の未来に向けて種を蒔く～

(3) 基本理念

本基本構想・計画では、これまでのコミュニティの成長を踏まえ、コミュニティを「木」に例えて基本理念を描くこととします。コミュニティの基本的な考えを「根」、地域の実態や住民の状況を「幹」、コミュニティ運営協議会やその事務局、部会、構成する自治会、各種団体等の地域組織を「枝」、目に見える事業や活動を「葉」、その先に生まれる成果を「実」、未来につながる部分を「種」と表現します。

これまでの第2次基本構想・計画では、「成熟した」「個性輝く」「つながりひろがる」をキーワードに、それぞれの「木」をより高く、大きく成長させていくことを目指して、組織の強化や事業の充実、つまり「枝・葉の成長」が図られてきました。

しかしながら、高齢化、核家族化による社会的孤立の増加、価値観やライフスタイルの変化による地域参画の機会や時間の減少、それらに伴う地域活動への関心の低下等の社会全体の変化とともに、地域課題や住民ニーズ、担い手となる住民の事情も10年前、20年前とは変化してきています。それらの変化を背景として、既存の枠組みにとらわれることなく、地域の事情にあった組織と事業の見直しに取り組む必要があります。

そして、最も大きな課題として、コミュニティに対する基本的な考え、「根の揺らぎ」があります。宗像市におけるコミュニティ施策が本格化して20年余り、地域にとっても、行政にとっても「コミュニティ」が当たり前のものとなり、定着してきたと同時に、関係者や住民の中でその役割や重要性に対する認識が十分でない状況が見られます。

これらの実態を踏まえ、目指す将来像の実現のため、次の4つを基本理念に定めます。



【①根を確かめる ～基本の考えに立ち返る】

今一度基本の考えに立ち返ることに、まずは取り組みます。地域、行政それぞれが市民参画条例に示す理念や、これまでに述べたコミュニティの役割や重要性、「住民自治」「地域分権」の意義を再認識するとともに、各地区のまちづくり計画で描く「なりたい姿」の再確認あるいは語り直しを行っていきます。

【②幹を知る ～地域の実態、住民の変化を捉え、「できること」「すべきこと」を整理する】

茂る枝、葉を支える幹の太さは、地域の力強さそのものです。その地域の実態、人の変化を捉えることは、よりよい成長に欠かせません。コミュニティ関係者を含めた地域住民同士が相互に理解を深めるとともに、地域の自己分析を行い、地域で「できること」、コミュニティの「なりたい姿」に向けた「すべきこと」を整理する必要があります。

【③枝・葉を整える ～より永く、親しみやすく、組織と事業の最適化】

木の枝が伸び、葉が茂ることはよいことですが、それが過ぎると、周囲に悪い影響を与えることもしばしばです。今後の持続可能性を念頭におけば、これまでの「より大きく、より高く」から、「より永く、親しみやすい」存在にコミュニティを育てていくことが肝要です。支える幹、地域の実態にあった組織や事業となるよう、地域組織ごとの役割の再確認や分担の見直しを検討し、地域住民にとって担いやすい地域組織への変革を図ります。あわせて、これまでの地域組織による活動にこだわらず多様な主体との連携を進め、「できること」を増やしていきます。地域の役割やニーズに基づき事業の最適化や特色を活かした取り組みを強化し、「すべきこと」を実践していきます。当然、これら組織と事業を支える各制度の見直しも進めていきます。

【④実をつけ、種を蒔く ～多様な住民の参画から次世代の育成へ】

「実」はこれまで関わり少なかった多様な地域住民が、コミュニティ活動へ参加、参画し、それらが継続されていくこと、「種」はそれらの地域住民が、次の担い手となっていくことを表します。活動への参加、参画を通して、子どもや若い世代を中心に地域住民の地域への愛着を育むことで、未来へつなぐ持続可能なコミュニティを形成していくことを目指します。

これら4つを基本理念とし、基本計画において具体的な支援策や検討していく事項、行政と地域の役割分担を示します。